

**「響きあう」援助関係論**

—間主観的な「共感」を基盤とする主体性の創造を求めて—

○ 臨床ソーシャルワーク研究所 衣笠 一茂 (2529)

キーワード：援助関係 間主観性 「共感」の構造

**1. 研究目的**

筆者はこれまで、演繹的な「ヨコのものをタテにする」論理展開ではなく、葛藤する実践に可能な限り密着し、そこからソーシャルワークの独自固有性を担保しようとする「実践の科学化」と呼ばれる論理展開を行ってきた。ここでは、従来の近代的個人像に固着した「自己決定」という価値・原理を弁証法的に止揚しながら、現象学に礎を持つ「間主観性」の概念を援用して、「共同性の価値」と「関係性の原理」という新たなソーシャルワークの基盤となる論理枠組みを提出し（衣笠、2015）、さらにその価値規範に基づいてソーシャルワークが「どのような社会の構築を目指すのか」についても、マイクロ・メゾ・マクロそれぞれの位相における報告者自身の実践を参照しつつ、「多様な主体がさまざまにかかわりあう相互作用関係に基づいて、存在の意味の多様性を創出・担保する社会」と定義づけることに成功している（衣笠、2021）。

このようなプロセスを経てきた中で、新しい理論の完成に向けて最後に必要とされるのは、「では、どのような方法で、そのような社会は構築されるのか」という、ソーシャルワークの具体的な方法論的専門性についての問いである。これは、理論を単なる空疎な理念として終わらせるのではなく、まさに「実学」としての「ソーシャルワーク学」を鼎立する上で、必要不可欠な問いであるといえる。

**2. 研究の視点および方法**

この問いに答えるために、報告者が実践の当事者として現在かかわっている不登校の中学生とその家庭、適応障害を持つ人々、在宅生活を営む高齢者、の三つの実践現場を具体的な調査対象として、「ソーシャルワークに固有の方法論的専門性」についての論究を行いたい。そのことをもって、既存のソーシャルワークの理論を、一歩進める知的営為を形にすることが出来る则认为る。

研究方法としては報告者自身が実践の当事者として、また研究者としてかかわる「参加型アクション・リサーチ（Participatory Action Research; PAR）」という方法を採用する。また調査対象としては、報告者がかかわる多様な実践の中から、「不登校の中学生とその家庭への援助」の事例1例を、その事象を構成するエスノグラフィーとして抽出し、分析の対象として措定する（PARと事例＝エスノグラフィーについては、衣笠2021を参照のこと）。

### 3. 倫理的配慮

本要旨は「日本社会福祉学会研究倫理規程」及び研究倫理規程にもとづく「研究ガイドライン」を熟読した上で作成している。とくに調査対象への事前同意については、「一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規程（2018年5月27日施行）」の各則（説明と同意）第8条に基づき、本研究の調査対象となる個人及び団体・組織に対して研究の趣旨等を十分に説明するとともに、研究の実施についての同意を得ている。

### 4. 研究結果

事例の分析から明らかであるように（事例資料は当日配布の上回収する）、不登校で社会的ひきこもりの状態にあったA君には、「社会」に積極的に自己を「投企」していこうとする「主体性」が涵養されるようになったことが理解される。

例えば、ただ「一緒にラーメンを食べる」「いっしょにぼーっと海を眺めている」という、同じ時、同じ空間、すなわち同じ「場」を「共有」することを通して、報告者とA君との「あいだ」に何らかの「共鳴する関係性」が構築され、その関係性をもってA君が「多様な主体がさまざまにかかわりあう相互作用関係に基づいて、存在の意味の多様性を創出・担保する社会」を構成する「主体」としての位置を獲得すべく、自分の部屋から一步外の世界へと踏み出す「創造性」を発揮し得るようになったことが理解されるだろう。そのうえで、次はこの「共鳴する関係性」とは、いかなる構造を持った、どんな意味のある「関係性」なのか、その方法論的な独自固有性を論究してゆく必要性が提起されることとなる。

### 5. 考察

以上のように、同じ時空間という「場」を共有し、そしてそこで何らかの「共鳴する関係性」が構築され、そのことによってソーシャルワークがめざす「間主観的な主体性」が構築されることが明らかとなった。報告者はここで、間主観性の概念から「共感する人格」が形成される構造の解明をめざした、Scheler, M.の理論を基礎にもつ紀平（1998）の所論を援用しつつ、「ソーシャルワークがめざす主体性の構築に向けた援助関係の構造」の定式化を試みたい。この「新たな援助関係論」の構築をもって、価値基盤～目的～方法、という一貫した論理展開を持った、「ソーシャルワークの独自固有性」についての論究を、筆者の立場からのオリジナルな理論として完成させることを試みたいと考える。

#### 参考文献

- ・ 衣笠一茂（2015）『ソーシャルワークにおける価値と原理』ミネルヴァ書房。
- ・ 衣笠一茂（2021）『ソーシャルワークの方法論的可能性』明石書店。
- ・ 紀平知樹（1998）「マックス・シェラーの共感論—ケアの哲学のために」『待兼山論叢．哲学篇』32号、大阪大学大学院文学研究科。